

# 縄文土器の胎土分析

## —常総粘土層と土器の胎土分析について—

上條朝宏 石川隆司

### はじめに

#### I 偏光顕微鏡による一次鉱物鑑定と分析方法

#### II 萤光X線分析法による土器胎土分析の基礎研究

### 論文要旨

#### I 偏光顕微鏡による一次鉱物鑑定と分析方法

土器の製作技法の検討や胎土分析を行う場合には、土器製作時に使用されたと推察される周辺地域の粘土層との比較検討が必要となってくる。ここでは、比較的広範囲な分布圏をもち、生成された粘土層が限定しやすい地域として、茨城県の常総地域に分布する常総粘土層を選択した。この常総粘土層は東京・千葉・茨城県（板橋粘土層・松戸粘土層・常総粘土層）と広範囲に分布しており、粘土層の生成時期が7～8万年前の御嶽火山第一浮石層（Pm-1）の降下期に相当している。このため本文中では、この火山灰の特徴と比較をしながら、常総粘土層が分布している地域の遺跡から出土した土器胎土との検討を試みた。

#### II 萤光X線分析法による土器胎土分析の基礎研究

本報は、萤光X線分析法による土器胎土の分析についての基礎的な実験結果の報告と、これに関する若干の考察である。関東地方東部に分布する常総粘土を主に分析対象としその特徴を把握するとともに、周辺遺跡出土土器の胎土と比較検討を行なった。その結果、粘土層はローム層に比べて珪長質でケイ素などに富み鉄が少ない傾向にある。また常総粘土層と成田層上部を比較すると、アルカリ金属元素やジルコニウムなどで傾向の相違が認められる。土器胎土の分析結果を合わせてその製作技法について検討すると、粘土層の特徴に対応する粘土、特に常総粘土を主体とし、これに混和材を添加して粘土素地を調製したものと考えられた。加えてこのことは、粘土の焼成実験から常総粘土は適当な添加物を加えないと破損しやすいという結果に付合している。